

猫蓑通信

第121号

令和五年
(2023年)
7月15日発行
(年4回発行)

一文字ぐるぐるの夜

朱鷺庵文字宗匠追悼

鈴木千恵子

橘文字さんは、関口芭蕉庵の連句教室が芭蕉記念館に場所を変え、明雅先生がご出席されなくなつて深川連句会と名前を変えてからも、ずっと会の幹事を務めてくださいました。体調を崩された昨年末も、作品のまとめのために連句会に出席され、この三月は、プリントを託されたお嬢さんのさよりさんがわざわざ会に持参してくださいました。

明雅先生の警咳に接したわたしたちは、みんな先生の大ファンでしたが、文字さんもちろんその例外ではありませんでした。三月に最後に電話でお話したときにも「先生に頼まれた深川連句会の仕事ができなくなって申し訳ない」とおっしゃっていました。先生の教えは、かつ



てお住まいだった町田でも「朱鷺の会」を組織して広められ、福田真空氏の天の川連句会の活動を積極的に支援していらっしゃいます。

た。ちなみに文字さんの朱鷺庵という庵号は、佐渡の連句に熱心に関わっていて朱鷺もお好きなので、明雅先生が提案されたと同つています。そのように深川連句会に力を注がれていた文字さんが、毎年一度ほどお休みされるときがありました。放送大学のスクーリングの日です。長年に亘つて、放送大学を受講されていた文字さんは、学ぶということを大切にされた方でした。例えば「猫蓑通信」五十二号から六十二号まで連載されている「伊勢派散策」のシリーズ。未読の会員には、是非目を通していただきたいです。

他人への気配りをいつも忘れない文字さんでしたが、会員と必要以上につるまないと一面があつた印象です。そんな文字さんとしみじみとした一夜をご一緒した思い出があります。明雅先生の一周忌に、会員一同で熊本市の往生院へ伺つたとき。二村文人さん・青木秀樹さんと四人で町に出掛けました。熊本という非日常の夜でした。文字さんは連句と同じくらい、歌舞伎や落語や講談もお好きでした。文人さんも古典芸能をこよなく愛されていたので、団体行動は苦手とおっしゃっていた文字さんも一席囲もうという気になったのではないのでしょうか。郷土料理の「一文字ぐるぐる」(葱ぬた)を食

た。ちなみに文字さんの朱鷺庵という庵号は、佐渡の連句に熱心に関わっていて朱鷺もお好きなので、明雅先生が提案されたと同つています。そのように深川連句会に力を注がれていた文字さんが、毎年一度ほどお休みされるときがありました。放送大学のスクーリングの日です。長年に亘つて、放送大学を受講されていた文字さんは、学ぶということを大切にされた方でした。例えば「猫蓑通信」五十二号から六十二号まで連載されている「伊勢派散策」のシリーズ。未読の会員には、是非目を通していただきたいです。

●目次●

▼一文字ぐるぐるの夜

朱鷺庵文字宗匠追悼

鈴木千恵子

1

◎令和五年亀戸天神社藤祭例會作品六巻

▼執筆を終えて

永田吉文

2

◎令和五年亀戸天神社藤祭例會正式俳諧

◎令和五年えひめ俳句全国連句大会

猫蓑会員受賞作品五巻

3

・愛媛新聞社長賞

歌仙「奥土の夜陰」

白崎ひろ子

4

・テレビ愛媛賞

歌仙「秋蝶に」

佐々木有子

5

・庚申庵倶楽部賞

歌仙「海神の」

橋本枯野

6

・俵口実行委員会会長賞

歌仙「杖をつく」

高塚霞

7

・俵口賞

歌仙「麗しき大樹」

鈴木千恵子

8

▼高鍋今昔

三木俊子

9

▼連句の先達・誌上インタビューQ&A

その② 島村暁巳さん

10

▼事務局だより

11

したことが忘れられません。今では、みなさんが故人になられました。

冒頭の深川連句会の四月の発句は、どの座も、文字さんの追悼句でした。

麗月や千穂染の柝の悲し

千恵子

師の教へ守り通して花に逝く

鑑

大川にひと声残し雁帰る

千恵子

心からご冥福をお祈りします。合掌。

本紫の座

二十韻「太鼓橋」

坂本孝子 捌

登り佇つ明日なき春の太鼓橋 孝子
 霞棚引く神御衣の裾 季何
 百千鳥ビルのあはひに鳴き交ひて 鑑
 老舗の技を練切の菓子 荷夕
 夏月に濡れてしばたく目の化粧 あき子
 女王は肌に蛇を這はせる 夕
 弁護士の資格を取りにニューヨーク 季
 ポイ捨てゴミに混じる寶石 鑑
 また買つて飾る場もなし酒の壘 季
 演説原稿任すA I 夕
 ナオ 年の瀬の木の葉とんだり走つたり あ
 掛取り野郎に毀された夢 夕
 トレッキング餅が呼ぶよ我の名を あ
 つのる想ひに小牡鹿の声 鑑
 満月の夜は魔女たちの品定め 季
 宇宙船またしくじつた秋 鑑
 ナウ ヘルメット自転車に乗る親も子も あ
 ぐりとぐらには消えぬ思ひ出 季
 爛漫と散りゆく花の香を惜しみ 鑑
 麗に流れ蒼穹の雲 夕

連衆 堀田季何 荒木鑑 西田荷夕
 岩崎あき子

江戸紫の座

二十韻「菅公の笑み」

鈴木美奈子 捌

菅公の笑み洩れたるや春の雨 美奈子
 苑の藤にも届く笙の音 有子
 四時間目蛙に眼借りられて 忠史
 給食係の長いエプロン 徹心
 同僚と分け隔てなく付き合はん 揺子
 この香水は彼のいちおし 奈
 蛇となり月まで追ふと鬼女の言 有
 財布の中はカードいつぱい 史
 裏山の地主は知らぬ異邦人 心
 幼き頃の流行歌聴く 揺
 ナオ 甘く辛く熱爛の酒けふも又 奈
 河豚に鮫鱈牡蠣におでんよ 有
 大谷君伴侶に誰を選ぶのか 史
 負けず嫌ひで化粧濃厚 心
 天守閣昇りて望む俺の月 揺
 ジャックオランタンハロウィーンの主 奈
 ナウ 鷹の爪その赤色のつややかさ 有
 自覚ないけど後期高齢 史
 端役にも花爛漫の映画村 心
 シャボン玉吹く夢は何処と 揺

連衆 佐々木有子 根津忠史 佐藤徹心
 上原揺子

若紫の座

二十韻「天神の吐息」

平林香織 捌

天神の吐息むらさき春深し 香織
 雨音を聞く耕の牛 アンズ
 実習で団扇作りを指導して 肇
 あすの献立少し奮発 純子
 シャンゼリゼ紅茶とガトー・フロマージュ ア
 しやちほこばつてお手をどうぞと 織
 婀娜めいた魔女の館に月涼し 純
 爛れた恋に灼かれゆく日々 肇
 石鹸をカタカタ鳴らし銭湯へ 織
 スポーツタオルにSHOHEIのロゴ ア
 ナオ もののふは何時でも死ぬる覚悟あり 肇
 自動運転わたる凍江 純
 変若水の効き目は御伽話にて ア
 月を見上げて涙ぐむ姫 織
 秋場所は推しの力士を独占め 純
 土地の新酒をしみじみと酌み 肇
 ナウ 電柱の碍子に二羽の緋連雀 織
 貸衣装屋に人だかりする ア
 渾身の琵琶の手向けに飛花落花 肇
 遠き帆影ののどらかな午後 純

連衆 松島アンズ 宇田川肇 近藤純子

小紫の座

二十韻「藤の房」

武井敦子 捌

風に在りしづかにゆるる藤の房 敦子
 玉砂利そつと濡らす春雨 千恵子
 宅配の走る街中あたたかに 吉文
 帽子傾げてやあと挨拶 霞
 海原を船進み行く月の下 蝸舎
 あの娘誘つて地藏盆へと 敦
 ままごとでつまべに染めてお嫁さん 千
 新製品の派手な看板 吉
 大太鼓合図の音の響きたり 霞
 白洲に座る極悪の与三 蝸
 ナオ刻々と移る赤富士連写する 敦
 ひとりキャンプでバーベキューして 千
 細道に小石を拾ふ哲学者 蝸
 髭の手入れは夜毎ひたすら 霞
 月を背にむささびの飛ぶ森深し 吉
 村の長老寒柝を打つ 敦
 ナウ質問に答へるチャットGPT 千
 円周率をきりもなく言ひ 吉
 薬に生命託して花万朵 霞
 都かすみで遠き古里 蝸

連衆 鈴木千恵子 永田吉文 高塚霞
岩田蝸舎

紺藤の座

二十韻「藤祭」

國司正夫 捌

太鼓橋渡り行くなり藤祭 正夫
 春を惜しみて座る撫牛 遊眼
 奴胤作る教室賑やかに 未悠
 ユーチューブでは人気抜群 転石
 岩陰の山椒魚の仰ぐ月 俊子
 百物語妖怪も出る 悠
 胸板の厚き彼氏に恋慕して 眠
 なんで私に使ふ流し目 石
 盗まれたびんづる尊者戻り来る 眠
 押売りならぬこはい押買ひ 俊
 ナオ同窓会肴海鼠腸進む酒 悠
 故郷しのび歳晩の駅 悠
 バイク駆り陸奥の旅二人して 夫
 愛の巣は今過疎の村なり 悠
 夢に見る月面探査未来へと 眠
 案山子の衣装すべて防炎 俊
 ナウ地芝居の主役を選ぶあみだくじ 夫
 楽屋弁当手作りの味 眠
 花一枝添へられ届く回覧板 悠
 忘れ霜踏む音の気味よく 石

連衆 内田遊眼 棚町未悠 林転石
三木俊子

令和五年四月二十六日 首尾
於 亀戸天神社

青藤の座

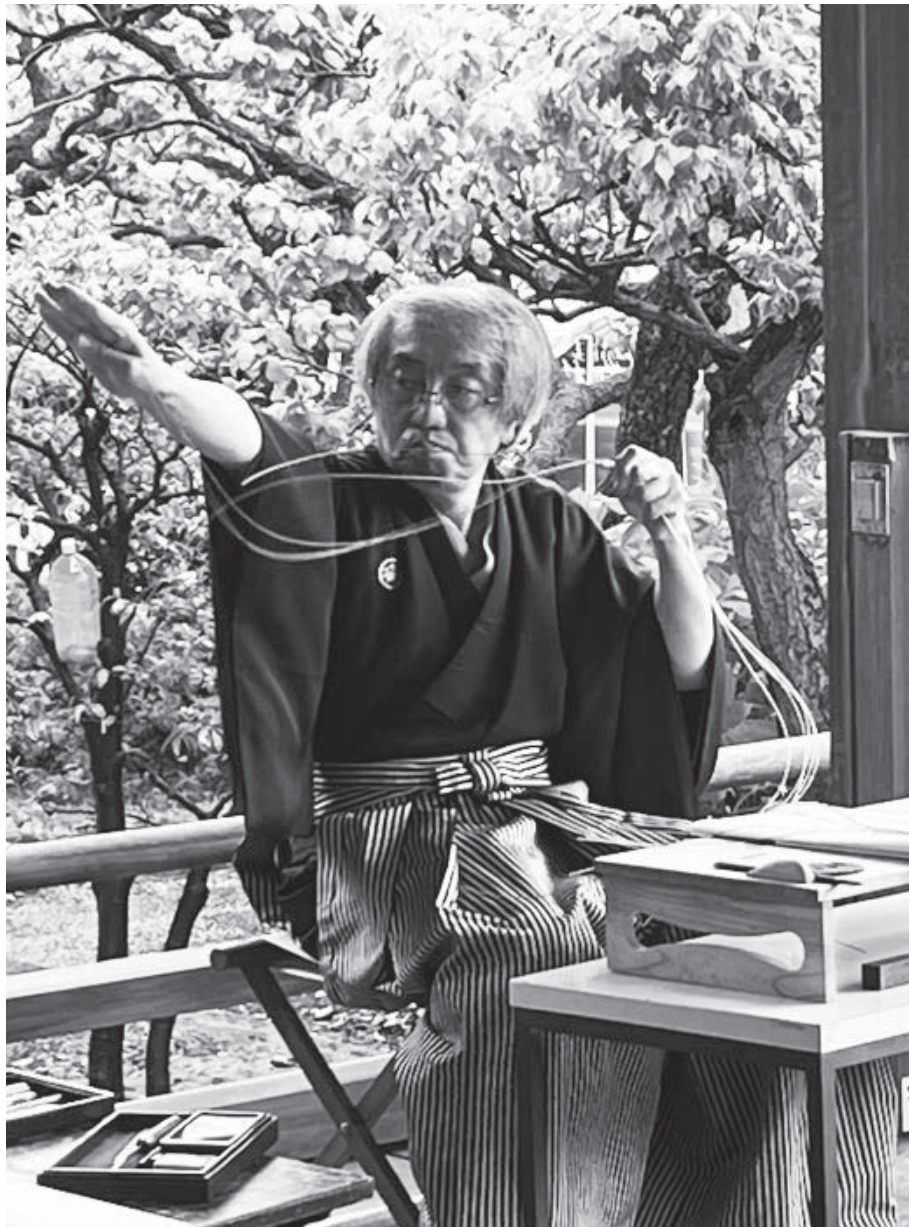
二十韻「翁と遊ぶや」

鈴木英雄 捌

季寄せ手に翁と遊ぶや藤の苑 英雄
 紫の雨濡つ春尽 雅子
 小綬鶏の鳴くこと頻りきりもなし 鄭和
 シフォンケーキを切り分ける皿 美智子
 月のもと笑顔で交はす生ビール 美代子
 諸肌脱で歌ふ若衆 雅
 無法松恋の心はひた隠し 和
 男気癒す女気の情 代
 たをやかな稜線望む浅間山 雅
 道の駅には野菜あまたに 智
 ナオ夜鳴蕎麦今なんどきと通ぶつて 代
 洛中洛外空也忌の僧 雅
 瞑想のジヨブズ宇宙へ融け入りぬ 智
 ただみつめあふそれだけでいい 代
 初恋の少年くれし烏瓜 和
 クライマックス地芝居に月 雅
 ナウ長き夜に描く爺の絵サイケ調 代
 薬三錠忘れずに飲む 雅
 花おぼろ吉野の葛の溶け難し 智
 磯祭から遠き歓声 和

連衆 武井雅子 高山鄭和 聖成美智子
山田美代子





紅白の水引をしごいて確認する。執筆文台捌きの一番の見せ場

御祓いを経て心が整った

正式俳諧執筆を終えて
永田吉文

令和五年四月二十六日、亀戸天神社藤祭奉納の正式俳諧興行、俳諧之連歌二十韻の執筆役を無事終えることができた。恩師である坂本孝子宗匠、いつも優しい武井雅子脇宗匠はじめ、鈴木千恵子会長や多くのお役の方々、色々とお世

話して下さった事務局の佐々木有子さんなど、猫蓑会の皆さんに心から御礼申し上げます。

令和元年の四月に第三十三回の藤祭奉納正式俳諧、十月に芭蕉忌正式俳諧が興行されて以来、コロナ禍によって正式俳諧の中止が続いていた時期だったが、令和三年に次の正式俳諧執筆を、とお話をいただいた時、迷わずお引受けした。その後も一年間正式俳諧の中止が続いたが、昨年十月二十七日の芭蕉忌興行と、今春の藤祭興行を無事に終えることができ、肩の荷が下りてほっとしている。

まず、江東区芭蕉記念館での芭蕉忌正式俳諧

俳諧之連歌二十韻 令和五年亀戸天神社藤祭奉納

新しき色に今年の五尺藤 千恵子

そぞろ歩きも軟東風の中 雅子

浅蜷撒く行楽客の来る前に 転石

小学生のラジオ体操 暁巳

ウ 月細く揺蕩うてある塔の先 香織

秘湯の宿にばつたんこ聞く 霞

汝が頬を照らししてくれる炉火欲しき 了斎

果ては悩まし艶やかな笑み 美代子

野良猫が欠伸してゐる縁の下 良子

膝の痛みもいつしかと癒え 敦子

ナオ 弁慶の七戻りなど気にならず 忠史

過去から届く崖の滴り 純子

オーク樽天使が少し盗み酒 徹心

お調子者と堅物の恋 ひろみ

忍び逢ふ阿蘭陀屋敷月凍てて アンズ

冬の北斗を探す坂道 遊眠

ナウ 何やらを鳩がついばむアスファルト 荷夕

F M放送名曲の旅 あき子

学成りて帰る故郷の花霞 孝子

春の大根朝市で買ふ 執筆

宗匠 緑華亭孝子

連衆 武井雅子 鈴木千恵子 林 転石

島村暁巳 平林香織 高塚 霞

鈴木了斎 山田美代子 本屋良子

武井敦子 根津忠史 近藤純子

佐藤徹心 江津ひろみ 松島アンズ

内田遊眠 西田荷夕 岩崎あき子



歌司が花を活け、菅公御影前に捧げる



知司による興行開始宣言

に向け、事前に渡されたDVDで、今は亡き桃径庵二世式田恭子さんなどの執筆姿の所作を見て自宅練習した。その後、通し稽古の日をいただき、他のお役の方々も一緒に稽古していただいた。やはり紋付袴での練習はありがたしい。着物は案外動きやすかったが、袴の裾捌きが難しく、立ち上がるたび何度も裾を踏んでしまった。そこで本番では着付係の岩崎あき子さんに袴を上げ気味にしてください、事なきを得た。稽古で得た知恵である。

芭蕉忌興行の当日、本番前の稽古ではまあまあ
あの出来だったと思うが、本番ではあがつてしま
まい、不出来だった。正式俳諧を初めて見る方
には一連の所作が自然に流れて感じられたよう
だった。所々で所作を抜かしていたことであ
るとで気が付き、猛省させられた。
亀戸天神社神楽殿での正式俳諧では、立礼な
ので袴を踏む心配はなかった。立礼方式ならで
はの諸々の位置関係や所作の違いなどがある
が、やはり事前の稽古が一日あり、実地に確認
することが出来た。
そこで大丈夫と思ったにもかかわらず、当日
本番前の稽古ではあちこち出来なかった。しか
し本番では不思議と冷静になり、淡々と所作を
こなすことができた。稽古のあと本番までの間
に、本殿での天神様への御参り、御祓いを経た
後だったせいだろうか、頭がすっきり整ってい
て、自分の所作の順序がよくわかった。
前日に吟声を練習しすぎて少し喉が枯れ気味
だったので、本番の吟声ではあまり大きな声
を出せず、やや抑え気味に発声していたが、ほ
ぼ間違えることなく一巻を読み上げることが出来
た。万葉集(三三五三番)の人麻呂の歌にも「言
挙げ」とあるように、言葉の霊威の発動により



句の花の句を詠むべく進み出る宗匠

令和五年藤祭正式俳諧(第三十四回) 配役

- 宗匠……………緑華亭孝子
- 脇宗匠……………武井雅子
- 執筆……………永田吉文
- 知司……………佐藤徹心
- 座見……………高塚霞
- 座配……………江津ひろみ
- 花司……………林転石
- 配硯……………近藤純子
- 所作指導……………武井雅子
- 奏楽……………佐々木有子
- 太鼓合図……………根津忠史
- 解説……………鈴木千恵子



無事、正式俳諧興行を終え、一同で記念写真

神の加護を祈るのが、まさに吟声といえる。言葉、句を、声に出して唱えることが祈りに通じるのだ。そう考えて、一句一句を丁寧吟ずるような心がけた。

満尾した懐紙を菅公の御影の前に奉げ、無事に舞台の袖へ退いたところで、一人満足感にひたつた。

この一巻は、後日あらためて本殿で神前に奉納すべく、執筆が懐紙に墨書する。このゆかしい伝統が好きだ。小学生のころ習字の塾に通い、そこで正座と墨の匂いを覚え、筆と墨で和紙に文字を書くのが好きになった。奉納の懐紙を仕上げるまでには何度も失敗してしまいが、書き直すのは苦にならない。墨の匂いが心を鎮めてくれるのかもしれない。有子さんからいただいた懐紙の見本も、大いに参考になった。猫簞会の皆さん、本当に有難うございました。楽しい思い出になりました。



上・菅公御影に奉げるため、宗匠が神官から玉串を受け取る



観客への正式俳諧解説役は鈴木千恵子会長

亀戸天神社奉納後直会興行二十韻二巻

令和五年五月二十四日首尾 於カラオケ館亀戸店

二十韻「風変はる」 鈴木千恵子 捌

風変はる卯花垣を抜けるとき 千恵子
 「もついいかい」と半ズボンの子 有子
 地図広げ留学先を決めかねて 英雄
 濃いめの珈琲すする幸せ 美奈子
 リズム良き潮波の浜昼の月 有
 とんぼを君の指にとまらせ 千
 魂迎へ昔の彼を呼び出して 奈
 落書のある路地に誰が影 英
 振り向いたそいつはなんとこのつべらぼう 千
 小泉八雲で英語学習 有
 ナオ 狼の遠吠えしきり旅の宿 英
 もがり笛聞き月も踊るか 奈
 タペストリー五年をかけて仕上げたる 有
 達磨大師を真似て参禅 千
 手も足も出ない高嶺の太夫なり 奈
 お歯黒溝で袖濡らす夜々 英
 ナウ 年縞が明かす歴史の一ページ ※ 千
 納税期には友の名を見る 有
 花の中酒蔵続く古都を行き 英
 春宵しばし低吟の詩 奈

連衆 佐々木有子 鈴木英雄 鈴木美奈子
 ※ 年縞||湖沼などの底の堆積物が形成する縞模様

二十韻「九人衆」 永田吉文 捌

新緑に集ふ笑顔や九人衆 吉文
 クリームソーダ透きとほる泡 孝子
 針の下古レコードの波打つて 敦子
 ゆつたり座る縁の座布団 雅子
 海外へ赴任の友に月さやか 転石
 夜寒の闇を訪ふも嬉しき 孝
 今年酒酔ひにまかせる恋心 雅
 資産運用学ぶ講習 敦
 駅前にはタワーマンション建つといふ 雅
 列ひたひたと出づる托鉢 孝
 ナオ 密猟の山に秀でた犬を連れ 全
 スノーボードに弾む月影 敦
 バージンを望むは神の思し召し 孝
 年の差婚も私幸せ 転
 悠々と擬似餌を放つ流し釣り 雅
 声も豊かに聴かす船唄 孝
 ナウ 来日す平和来る日を夢に見て 文
 今も懐かし母の露味噌 雅
 旅にあり花爛漫の越の国 全
 風にふんはり春のスカーフ 敦

連衆 坂本孝子 武井敦子 武井雅子
 林 転石

第二十七回 (令和五年)

えひめ俵口全国連句大会受賞歌仙五巻

152

愛媛新聞社長賞

歌仙「奥土の夜陰」 白崎ひろ子 捌

冬銀河奥土の夜陰にはかなり ひろ子
 栄華の堂宇に置ける初霜 枯野
 男風呂野球談義の飛び交ひて 子
 自販機までもキャッシュレスかい 野
 原つばを占めて背高泡立草 子
 ぽつり昼月物の音の澄む 野
 児等の指一瞥もせず赤とんぼ 子
 外八文字に太夫道中 野
 抜け出して来いよ海辺のあの部屋へ 子
 ブルジュ・ハリファで漬けるお新香 野
 砂時計かつて熱砂の刻のあり 子
 扇子静かに閉ぢて投了 野
 山車過ぎて総身に浴びる月の光ゲ 子
 椎間板の長き遠吠え 野
 塀垣に「へのへのもへじ」力んでる 子
 床屋の親爺いつも陽気で 野
 学僧の薄くまどろむ花の中 子
 春障子開け猫のご帰還 野
 ナオ 練雲丹と地酒と友の蝨声と 全
 チョンと柀が入り芝居幕切れ 子
 宝くじ買へば一粒万倍日 野
 吹きこぼれてる鍋の素麺 子
 カウモリとヒキガヘルぬて魔女の宴 野

狂つてみようか闇に風死す

掻き抱く君と未来をもろともに

夢ばかりなる男に燃え尽き

シャッターが瞬時とらへる躍動感

波紋つぎつぎ川の石投げ

月食と天王星食ダブルショー

針運ぶ手に新絹の艶

ナウ 司教館の厚き扉よ小鳥来る

お掃除ルンバやる気満々

喜寿祝ひビタミンカラーの靴下を

太極拳の淀みなぎ舞

入江には花誇らかに帆掛け船

そよ風頬に明日葉の道

連衆 橋本枯野

令和四年十一月二十七日起首

同十二月二十六日満尾 於 文音

テレビ愛媛賞

歌仙「秋蝶に」

佐々木有子

秋蝶に低くゆつくり迎えられる

ひよんの実吹いて歩む野の道

月の家親子の風呂の楽しくて

残る塗り絵はあと一頁

今年こそ世界遺産の城めぐり

瀑布眼下に遊覧のへり

洞窟をざわと湧き出る蚊喰鳥

埋蔵金は絶対にある

越後屋の妾になんてならないぞ

蚤の夫婦が手をつなぎ行く

御機嫌のホテルのケーキバイキング

セーヌの水面揺れる寒月

鳩や鳩つん潜れとや下校の子

百科事典を繙いてみる

ITと五分の勝負の本因坊

イス席ありとイベントのピラ

花篝神舞い給う御苑なり

頬なで過ぎるは軟東風か気か

ナオ 頬なで過ぎるは軟東風か気か

「ひるのいこい」の聞こえくる頃

おむすびのころり転げて鼠穴

さっぱりわからぬ手品師の技

宇宙から青い地球を見てみたい

ビキ二娘をズームアップで

雷鳴つて二人しつぽりワンルーム

夜は明易し心残れる

勉強をするには机まず整理

壁に掛けたる般若波羅密多

月影の深深と沁み渡りおり

鯉漬にて茶漬一杯

ナウ 紅葉の千鳥ヶ淵を散歩して

古地図マニアの長き蘊蓄

調べ物検索サイトをクリックし

鈍行列車の旅路くねくね

花よ降れ世界平和は夢じゃない

ふうと吹きたるたんぼの絮

連衆 御園魚彦 江津ひろみ 北龍志保子
令和四年十月十五日首尾 於 戸塚地域センター

第二十七回 (令和五年)

えひめ俵口全国連句大会受賞歌仙五巻

355

庚申庵倶楽部賞

歌仙「海神の」 橋本枯野 捌

海神わたつみの呵々大笑や夕日炎ゆ 枯野
 岩礁いわしほに舞ふゴメの騒めき ひろ子
 携帯の待受画面切り換へて 子
 地産地消がシェフのモットー 野
 新駅しんえきに到着電車秋涼し 全
 清夜せいやにきりり弓張の月 子
 触ふれてくる葡萄の房のたわわなる 野
 口づけまでの長き一秒 子
 君の声耳に残れる水琴鈴 野
 揺れ止まぬ世のカルト集団 子
 いつの間に天下国家が壺の中 野
 園の餅つき力合はせて 子
 雪晴ゆきはらの昼月ほんに嘘のやう 野
 タンス貯金で重い抽斗 子
 X線胎内仏の御座すといふ 野
 開けつ広げな近所付き合ひ 子
 花おぼろ北も東も眠たげに 野
 出来ばえよろし卓の青ぬた 子
 ナオ トラックに養蜂箱の家族旅 野
 囚はれ溺れ行き場なき恋 子
 真実の愛に野獣の呪ひ解け 子
 お前めんこいお多福に似て 子
 初市の出店賑はふ一番町 全

橋のたもとに早も寒梅

退院は赤いパンプス履くと決め

ノンアルバーで極上の酔ひ

滑舌の少し怪しい我が鸚鵡

どんでん返し芝居幕引き

月光に射られて案山子棒立ちに

ISSの「きぼう」さやけし

ナウルーティンはカチカチ鳴らす鬼胡桃

名探偵のチェアに深々

白黒の邦画の台詞美しく

魚氷ういすに上る風はどこから

爛漫らんまんの花のさざめく通り抜け

退職祝ふ春の寄せ書き

連衆 白崎ひろ子

令和四年八月二日起首 同九月五日満尾 於文音

俵口実行委員会会長賞

歌仙「杖をつく」

高塚霞 捌

杖をつく後姿や秋灯 霞
 名残の月とのぼる坂道 肇
 湖よりの風の匂ひに紅葉して あき子
 子らがきちんと守る留守宅 葵
 休日是一所懸命ボランティア 有子
 汗拭ひつつ並ぶ行列 葵
 杜若校章とする付属校 全
 天下分け目は三州にあり 肇
 豆絞まめぢりりいなせに巻いて家業継ぐ あ

高まる想ひ胸底に秘め

女へと変はる零時の化粧室

多様性として社会容認

譲られしインバネス着て月仰ぐ

探しものなら俺にまかせろ

絆創膏大中小と持ち歩き

からくり人形運ぶお点前

灰暮かすみに燭すぼんぼり花見船

山笑ふ頃届く絵葉書

ナオ 方丈の板戸を鳴らす雲雀東風

幼稚園やめ塾にしやうか

道路工事掘り出したのは埋蔵金

古地図家系図飽かず眺めん

なんにでもDNAは存在し

女王陛下の悩み果てなく

イマジンを流して深き夢の国

降誕祭のデートしつぽり

ぬくぬくと毛布の中に結ばれて

徳利転がし誰か泣いてる

月影に機織る母の肩薄く

青森産の檸檬宅配

ナウ 案山子にも襤褸着普段着外出着

スクナビコナの神はマレビト

白髭を撫でつつ昔語りして

銀の煙管に若鮎を彫り

咲き誇る大樹の花は今もなほ

蚕棚かいだま組み終はる一日

連衆 宇田川肇 岩崎あき子 石川葵 佐々木有子
 令和四年十月十七日首尾 於 庚申文化会館

俵口賞

歌仙「麗しき大樹」

鈴木千恵子 捌

麗しき大樹慕うて小鳥来る

千恵子

厨の窓に仰ぐ満月

美智子

村芝居初の科白を樂しみに

肇

子らは互ひにシートと指立て

ひろみ

PK戦その一蹴りに息をつめ

恵美子

蜜柑食べつつしばし休憩

をんみ

ウ 地吹雪の去つてきらきらみな光る

ろ

別れじやうずなクールビューティー

肇

上向いた鼻と黒子がいとほしい

ろ

行方不明になつた弟

み

いしぶみに刻む狂女の隅田川

智

夢の続きを見たい夏月

ろ

手に馴染み誰にも貸さぬ補虫綱

恵

フェラーリの価値乗つて初めて

肇

ひよいと出て悪戯をする付喪神

ろ

魚くはへた猫を追ひかけ

肇

花前線北へ北へと求めゆく

恵

靖国祭で戦友と会ひ

肇

ナオ 春風にとつと現はれ牛乳屋

恵

スタンプ十個五割割引

肇

賑やかに病氣自慢の種尽きず

ろ

港々に恋人がある

智

マフラーでがんじがらめにしたくつて

み

鏡に映し試す寒紅

肇

足音もしない御堂の薄暗さ

み

隠し戸棚の隅にバーボン

肇

ガンマンは投げたコインの芯を撃ち

ろ

即興で弾く映画音楽

智

真夜中の月が出るまで踊らうよ

み

始発ホームに揺れる秋桜

恵

ナウ 見はるかす平野の果ての山粧ふ

ろ

ふるさとからの荷物届きぬ

み

路地裏の老舗に雨のやはらかに

智

シヨーウインドーに笑ふ福助

千

夜勤にも愉しみはあり花明り

肇

空の果てまでぶらんこを漕ぐ

恵

連衆 聖成美智子 宇田川肇 江津ひろみ

関口恵美子 福澤をんみ

令和四年九月十九日起首 同九月二十七日満尾

於 庚申文化会館・文音

高鍋今昔
三木俊子

海外のリゾート地を思わせる宮崎空港に降り
たち、JR日豊本線の特急に乗り換え約四十
分、日向灘の美しい景観に気をとられていたう
ちに、高鍋駅に着く。人氣の少ないホームの向
こうに、高鍋藩士の息子で、日本初の本格的孤
児院を創設し、児童福祉の元祖と仰がれる石井
十次の像が顕彰碑と共に見える。駅員は一人だ
け、夜間は不在になるらしい。

客待ちをするタクシーもめつたにない駅前広
場に、昨年までの花壇に代わって巨大な金属製
のオブジェが置かれている。広い道路は伸びて
いるものの、店も食堂も何もない。人口二万余
の町の駅前と言っても寂しいかぎりだ。
けれど先祖のお祭りや財団法人の理事会に参
加のため毎年ここを訪れている私には、暖かな
ものに包まれる感じ。

(財)正幸会は、江戸時代この地を収めてい
た高鍋藩(初代より幕末まで藩主秋月家)の藩
校、明倫堂の古文書の散逸をおそれた祖父が、
私費を投じて保存することを第一の目的に、昭
和二十三年に設立したもの。小藩ながら文教・

文化を重んじていた藩の伝統を伝えるため、
一万六千冊余の本を収めた土蔵の敷地内に、そ
の後図書館を建てて町に寄贈。この度二億円を
かけて改修された。

高鍋関連で高名な人物といえば、上杉鷹山公
と、大津事件(明治二十四年、巡查がロシアの
ニコライ二世を暗殺未遂)の裁判官で、後に明
治天皇の侍講を務めた秋月左都夫の二人か。

鷹山公は、秋月家七代目藩主種茂公の弟君で、
上杉家の養子となった。疲弊の極みにあった米
沢藩を富国安民の思想の元、自らは一汁一菜、
木綿の衣服を常用し、漆、紅花、藍などの特産
品を育て製品化し、藩の経済と民の生活を改善

した名君として知られる。

心身共に童女のようなふうであつたと伝わる幸姫の、人形遊びのお相手をするなど、やさしい面も持ち合わせていたらしい。それでも、当時の家の格式違いは厳しく、秋月家が上杉家と両敬（挨拶、手紙の遣り取り、贈答などの折、対等の扱いをすること）になるまでには十五年を要したと言う。

鷹山公に比して、一般的には知られていないが、兄の種茂公も藩校を創設、士族の子弟は強制的に通学させたが、百姓町人の子でも志ある者には同じ内容を別に学ばせた。また、三人以上の子を持つ領民の夫婦に米を支給し、東北の二本松藩（丹羽家）と並び、日本初の児童手当と称賛されている。貧困の度合いすさまじかつた当時、夜逃げによる一家離散と、公然の秘密の「間引き」という悲惨な風習を防ぐためでもあつた。

高鍋は古来、ほとんど毎年甚大な台風に見舞われ、家屋、田畑、山林の被害は一方ならず、修復に労力と多額の費用がかかる。その上、そもそも戦に負け、秀吉によって筑前黒田から約半分の高鍋の地に転封され、家臣の数は変わらない訳で、藩の財政は恒常的に厳しく、領民の暮しぶりも貧しくなつてしまつた。

だが、殖産、開墾の一方、学問を重んじる気風が、江戸時代、ご維新、終戦後から今日まで続き、小さな自治体ながら、小・中・高校だけでなく、農業関係の専門学校も多く存在し、若

い男性の人口が多いのも特徴と言われている。宮崎県立高鍋高校は、九割が大学等に進学するだけでなく、昭和二十九年以来十回も甲子園高校野球に出場している。

マンガ、ピーマン、茶などの農業の他キャン、宝酒造などの大工場もあり、宮崎市内や近隣の町に通勤する住民もいて、落ち着いた暮しぶりが感じられる。

町立図書館では、「明倫堂文庫を学ぶ会」という住民有志の勉強会が毎月開かれ、種茂公の用人が書いた日誌を解説、解釈し、纏め「旧記抜書」として、毎年刊行している。

最新号は、文化七年（一八一〇年）から一四五年までの種茂公のご隠居時代である。統治体制の強化の一環として家老の処分、役職高齢化と必要人材の拡大、人材育成と格様に制約される小藩の人材登用の困難さ。改革に当たり中下級家臣の「存寄」を必要とする時代。幕府からの度重なる馳走役の下命。大名統制のさまざまな形で現れる参勤交代の折の条件など、現代の我が国と世界の情勢をも思わせるほどの、多難ぶりが見てとれる。小さな町の十年以上も続く活動に支援をさせていただいている正幸会として誇らしく、さすが、文教と文化の町（今の高鍋町のスローガン。因みに、町長は「百年の孤独」の製造元として有名な黒木商店の経営者）と、うれしくなる。

うれしいと言えば、今年は正幸会創設七十五周年に当たり、式典を行い、宮崎県出身の柔道



柿原政一郎記念高鍋図書館の蔵

家井上康生氏に講演をしていただき、町民の皆さんに大いに喜んでいただけた。

根性と礼儀を重んじる従来の柔道から、現在はデータを重視し、選手ひとりひとりに合った練習法、技、体形を身につけさせるスタイルに変化している。さらに、審判員のクセ（柔道の採点には「反則」をとられぬことが重要だが、試合の前半で厳しく後半になると緩むとか、その逆とか）を掴んで、それに対応した試合運びをさせることなど、非常に科学的なやり方を実現している、とパワーポイント付きで話され、驚いた。また、そうは言っても勝つことが一番大事で、そのためには理を超えて勝つ、勝たねばならぬと心身に染み込ませることが肝心で、

自衛隊への体験入隊も必要な訓練、と強調され、世界一、金メダル獲得の容易ならぬことが偲ばれた。
翌朝、曾祖父の開墾した山の方の本邸で神式の祭りを行い、墓参した。山のおちらこちら、崖の間にまですみれが咲いていた。ふと、久家

連句の先達・誌上インタビュー Q & A
その② 島村暁巴さん

Q1 ● 連句歴はどのくらいになりますか。

A 五十八歳で始めましたので三十二年になります。

Q2 ● 連句を始めたきっかけは何ですか。

A 三十二年前の初秋に、家内の寒雷での句友倉本路子さんから家内に、「連句をやらなない？」と電話があり、家内は「主人

道子さんを思い出した。彼女は終戦後、海外渡航の難しかった時代、大使館付きのお手伝いさんになって外国に滞在し、スエーデン刺繍を習得、帰国後日本中に広め、後にプチポアンの名手として手広く会社経営もされていた。先祖が江戸時代から同じ小路に住んでいた誼みで、親

ならやるかも」と私に振ったので、二つ返事で「やるやる」と答えました。その

しばらく前に、名古屋の歌仙「冬の日」の句碑に出会い、いたく感動しすぐに『連句入門』を求め読み始めたところだったという奇瑞！ 以後、神楽坂連句会、猫蓑会、朝日カルチャー、連句協会で月に三〜四回は一座、という幸せな日々でした。コロナ後はメール文音のみですが。

Q3 ● 初めての実作の場はどこでしたか。どのような様子でしたか。

A 初の実作は、赤城神社秋祭のお囃子がBGMの神楽坂連句会の発会の座で、秋元正江さんがご指導くださいました。

Q4 ● 明雅先生との思い出を教えてください。

A 私は連句で慕わしい第二の父母に会ったようです。父は明雅先生、母は路子さんです。印象的な先生の語録を。「連句は傍目八目、聞くは一時の恥、連歌十徳の効用、泳げない初心者もプールに放り込

しく接していただいた。女性活躍の先駆者として、いまお元気でいらしたらと残念に思う。子孫の最高齢者として祭主を務めた私も、来年のことを話すと笑われそうで、気がひける。でも必ずまた戻って来られそうないつもの感じで、高鍋を後にしたことだ。

み犬かきからでも泳いでもらおう育成を行う。」

先生と若林文伸さんとの三吟文音を巻き喫茶店で校合をした一刻も宝物です（*参考・猫通四十九号）。

また、お決めたになった式目への会員の疑義などで訂正を要する箇所はすぐ直されました。たとえば、

① 「式目の整理」（*参考・猫通二十一号）の、「用言、体言留めの五連続を嫌う」に対して古賀一郎さんが疑義を呈し、現在の「漢字、かな留の五連続を嫌う」に変更（*参考・猫通四十九号）。

② 『十七季』初版「異生類の打越を嫌わず」は、煩雑さと混乱を避けるために第二版では削除されています。

先生との座は楽しく、句を催促される扇子や「ほっほっ」のお声が耳に……。

Q5 ● 連句をやっていて、よかったことは何ですか。

A 五十年近くのサラリーマン生活で遊び



平成二十八年四月、亀戸天神社藤祭例会にて。坂本孝子さん、松島アンズさんと

事務局だより

も趣味も社員同士が多く、会社人間の典型だったので、退職直前に出会った連句の一座ははまさに夢の新天地でした。もし出会わなかったら、の老後の素漠を思うとぞつとします、

Q6 ●印象に残っている付け（または、発句、一卷など）を教えてください。

A 前述の、先生と文伸さんとの三吟歌仙「深川や」の一卷と、連句協会の座で前句、「棲みついた野良猫いつかいなくなり」、小生が「二宿一飯義理がござんす」と付けて、一座で褒められたことです。

Q7 ●連句の後輩にアドバイスがあれば、お願いします。

A スポーツと同じで本で学ぶよりもとにかくやってみることです。たまに「初めてなので今日は見学で」という方がいますが、私は「連句に見学はありません、さあご一緒に！」と言っています。

また、孕み句（事前に用意して置く句）は無用です（発句は用意）。あくまで前句の意を酌んで付けてゆきましょう。

作品作りも楽しいですが合間の雑談も大いに楽しみましょう。

「聞くは一刻の恥」の精神で気軽に質問を。また捌の機会が来たら尻込みせず引き受けましょう。一座が暖くフオーロしてくれますから。

●既往の行事

- ・四月二十六日（水）に、江東区亀戸の亀戸天神社にて、第百六十三回猫蓑会例会（藤祭例会）を開催。神楽殿にて正式俳諧興行（一般公開）の後、二十韻興行。今号P2以降をご参照ください。
- ・六月二十五日（日）に、アルカディア市ヶ谷にて、第三十三回猫蓑同人会総会を開催。歌仙興行。当日作品は次号に掲載予定です。

●今後の行事予定

- ・七月十七日（祝日「海の日」）に、江東区芭蕉記念館にて、第百六十四回例会（猫蓑会総会）を開催。歌仙興行。
- ・十月十八日（水）に、江東区芭蕉記念館にて、第百六十五回例会（芭蕉忌・明雅忌）を開催。正式俳諧興行の後、源心興行。

●猫蓑会リモート（ZOOM）連句会

- ・二月二十三日（木）開催の第十三回の未掲載作品と、四月八日（土）開催の第十四回、六月十日開催の第十五回の作品は次号に掲載予定です。
- ・第十六回は八月十一日（祝日「山の日」）の午後一時から開催予定。その作品も次号掲載予定です。

●リモート連句講習会を開催します

- ・ご希望があれば奇数月第一土曜日に、「猫蓑会リモート室」にてリモート連句講習会を開催します。筆記係やホストを務めるために必要な事柄も。
- ・ご希望の方は、平林香織《khira884@gmail.com》宛にメールでお申し込み下さい。その他の「猫蓑

会リモート室」使用申し込みも平林まで。

●猫蓑基金にご協力ありがとうございます

- ・匿名 令和五年五月 五千元
- ・広川一美様 令和五年五月 三千元
- ・基金口座 みずほ銀行新宿新都心支店
猫蓑基金 普通預金 3376045

●新会員

- ・由雄白山（京都府） 令和五年五月入会

●会員の転居

- ・小原濤声 茨城県水戸市内にて転居



季刊 『猫蓑通信』 第百二十一号

令和五年七月十五日発行

発行人 猫蓑会 鈴木千恵子

事務局 佐々木有子

〒161・0033

東京都新宿区下落合4・9・34・313

編集人 鈴木了斎

編集委員 奥野美友紀・佐々木有子・鈴木千恵子・

武井雅子・平林香織・御園魚彦

（五十音順）

印刷所 印刷クリエート株式会社